

第92話（70頁） 蛇の頭としっぽ

蛇のしっぽが蛇の頭と、どちらが先に行くかで、言いあらそいをはじめました。頭が言いました。

「おまえが前に行くのはだめだ。おまえには目と耳がない。」

しっぽは言いました。

「そのかわり、おれには力がある。おれがおまえを動かしているんだぞ。その気になって、木にまきついてみろ、おまえは一步も動けやしない。」

頭が言いました。

「べつべつに行くことにしよう！」

こうして、しっぽは頭からちぎれて、はいはじめました。ところが、頭からはなれたとたん、地面のわれ目にはまって、落っこちてしまいました。

「そもそも、ヘビって、頭と尻尾の部分が二つに分かれても生きていられるだろうか。すぐに両方とも死んでしまう気がするなあ。」

「そうだよ。トカゲは尻尾を切っても生きていけるけど…」

「イソップ物語にも同じ話があるよ。でも、こっちは頭と尻尾が喧嘩した挙句に先導役が頭から尻尾に代わるけど、ヘビの姿形は変わらず1匹のままだ。」

「アーズブカでは、前に行きたいと言い出した尻尾に対して、頭は実にそっけない。別々に行くことにしようぜ、といきなり最後通告する。」

「その結果、『しっぽは頭からちぎれる』。ここはロシア語も自動詞で、尻尾は自分の方から千切れていったように読める。これでは身も蓋もないわけで、互いにもっと話し合う余地と時間はなかったのだろうか。」

「千切れてすぐに、尻尾は地面の割れ目に落っこちてしまう。これも、いきなりで、展開が早い。笑えるというか、引き込まれる締めくり方だ。」

「尻尾はその後どうなったか。そもそも頭は千切れてどうなったか。例によって、アーズブカは読む人に想像させて、何も語っていない。」

「1匹のヘビのままのイソップでも、うまく進めなくて岩場の窪みに落ちたりする。すると、尻尾は『馬鹿なことで張り合おうとして、ひどい結果になりました』と殊勝に反省して詫びを入れてくる。そこは、アーズブカでは全く出てこない。」

「頭は社会の指導者を、尻尾は一般民衆を代表し、民衆が指導者にとって代わろうとしたが、やっぱり指導者は必要だった。そんな読み方もできないかな。」

「随分と意味深だね。だったら、現状肯定にも繋がりがねず、トルストイの考えとは、ずれてくるのではないか。」

「トルストイはなぜ、あえて尻尾に反省させなかったか。大変気になるところだ。」

「難しい話はともかく、ヘビはどうやって前へ進むのだろうか（一同、考え込む）。」

「普通は、体を蛇行させるとともに上下に波打たせ、接地部分を支点に浮かせている部分をキャタピラのように前に押し出すんだって。Yahoo!知恵袋にそう出ていたよ。」

「尻尾は自分が接地部分になって全体を動かしていると、誤解したか、あるいは、思い上がったのかな。」

<参考>

『イソップ寓話集』（中務哲郎訳、岩波文庫）所収、「蛇の尻尾と体」（362話）